

本研究は、日本の家族（イエ）の周期の中で見られる「潜在直系家族」と韓国の直系制家族（チバン）の変種である「分居的直系家族」をもって、日韓両国の社会変動（産業化・工業化）による家族の変化（核家族化）の相対的特性を調べてみたものである。というのは、戦後日韓両国における家族（日本の「イエ」と韓国の「チバン」）の変化を探ってみることによって、各々の社会の独自性（特殊性）と共通性（普遍性）がもっと明らかになってくると思ったからである。

また、本研究の具体的な研究方法としては、各々の家族（「イエ」または「チバン」）の変化の事例と意識調査を分析・検討してみることにした。その結果、次のようなことが言えよう。

まず、戦後日韓両国の社会変動（産業化・工業化）による家族の変化の推移は、伝統的直系家族（「イエ」または「チバン」、拡大家族）から夫婦家族（核家族）への傾向にあることが確かめられる。しかしながら、日本と韓国の社会変動（産業化・工業化）による家族（「イエ」または「チバン」）の変化は、両国ともに同じ「核家族化」の動向を見せているものの、その内容においては異なるところがある。すなわち、日本の家族（イエ）の変化（核家族化）においては、親（父母）と長男の分立からなる「分居的直系家族」（一時的分居）の存在は認められないものの、家族（イエ）の周期による「潜在的直系家族」が確かめられるのである。

一方、韓国の家族の変化（核家族化）においては、家族（チバン）の周期による「潜在的直系家族」の存在の可能性もありうるものの、親（父母）と長男の分立からなる「分居的直系家族」（一時的分居）の実現が確かめられる。というのは、韓国の家族の変化（核家族化）における長男と親（父母）との「一時的分居」は、日本の家族のばあいとは違って、「潜在的（直系家族）」というより「分居的（直系家族）」とみなしたほうが妥当であると思われるからである。

また、日韓両国における家族意識の調査結果を分析・検討してみたところ、日本の家族（イエ）より韓国の家族（チバン）が家族関係や家族構成員の相互作用によってもっとよく結ばれていることがわかる。したがって、親（父母）との同居の希望が前提になる「分居的直系家族」（一時的分居）は、日本の家族（イエ）より韓国の家族（チバン）のほうが相対的に高い実現性をもっていると言える。一方、日本の家族（イエ）は、これから家族関係や家族構成員の相互作用がもっと弱くなっていくと思われる。したがって、韓国の家族（チバン）より日本の家族（イエ）のほうは、韓国の家族（チバン）における「分居的直系家族」（一時的分居）の実現性は相対的に低くなっていくばかりでなく、家族の周期による「潜在的直系家族」が見られるだけであると言える。